

慶應義塾の一貫教育

福澤諭吉の理念に基づき、 実学の精神を実践する 私学教育機関の最高峰

1858年、中津藩奥平家の邸内に福澤諭吉が開いた蘭学塾を発祥とする慶應義塾は、2008年に近代の総合学塾としてアジアでも稀有な創立150年という栄えある歴史を刻みました。その歩みは、まさに日本の近代教育の歴史といっても過言ではなく、小学校から大学・大学院までつながった「一貫教育」という大きな枠の中で、「感動教育実践」をキーワードに、先駆的な教育を実践しています。

こうした中、2013年には10番目の一貫教育校となる慶應義塾横浜初等部が開校。児童・生徒の多様な個性を育みながら、21世紀のグローバル社会を先導しうる、教養あふれる人材を育成する努力を続けています。

「今日子供たる身の独立自尊法は
唯父母の教訓に従て進退す可きのみ」
——この言葉は、慶應義塾の創設者・福澤諭吉が明治33（1900）年に揮毫し、幼稚園生に示したものです。慶應義塾幼稚園では、この書を入学式や卒業式に掲げて、福澤諭吉の教訓を今日にまで伝えています。

2008年に、日本の近代総合学塾として初めて創立150年という歴史を刻んだ慶應義塾の起源は、安政5（1858）年、江

戸築地鉄砲洲に誕生した蘭学塾にまで遡ります。福澤諭吉は当時まだ数え年で25歳という若さでしたが、「全社会的先導者たらんことを欲するものなり」という熱い気概のもと、志高い幾多の人々を門下集め、近代日本国家の建設をリードしていきました。

この間、慶應義塾はたゆむことなく独立自尊の人材を育み、その卓越した精神は「未来への先導」という今日のテーマにまで脈々と息づいています。

多くの志願者を集める 慶應義塾幼稚園の魅力とは

福澤諭吉がその歴史的著作『学問のすゝめ』において、人間の自由と平等、権利の尊さを説いたこと、あるいは門下の高弟らとともに編纂した『修身要領』に、「独立自尊」の言葉を遺したことなどは周知の通りです。

実証に基づく科学的学問である「実学」を尊び、欧米列強に伍して日本と世界を切り拓こうとした福澤の時代精神は、まさに21世紀におけるわが国の状況とも深く重なり、響き合っています。

その福澤精神を受け継いだ慶應義塾の人気のほどは、少子化がこれほどまでに騒がれる中であって、多くの入学志願者を集めていることから明らかです。2016年度の入学状況を振り返ると、男子96名、女子48名の募集人員に対して、志願者は男子897名、女子605名の計1,502名を数えています。

また、親子2代が同じ慶應義塾で学ぶ、あるいは3代、4代が「同窓生」であるという例も珍しくないのが慶應義塾の特色のひとつです。

徹底した一貫教育制度をはじめ、「独立自尊」の教育理念、「社中協力」など独自の特色が、慶應義塾の出身者に「自らが体験した学生生活の充実感や感動の体験を、自分の子どもにも味わわせたい」と感じさせているようです。

何代にもわたるこうした根強い人気に加えて、福澤精神の精華を身につけた多くの卒業生が、今日の社会



慶應義塾幼稚園



慶應義塾横浜初等部

において幅広くグローバルな活躍を見せていることが、慶應義塾の人気をいっそう後押ししているのです。

慶應義塾横浜初等部が開校 さらに幅広い教育体制に

2013年、神奈川県横浜市に慶應義塾の10番目の一貫教育校となる「慶應義塾横浜初等部」が誕生しました。幼稚園から大学に至るまで、多くの志願者を集めている慶應義塾の例に漏れず、4年目の今春も、入学定員男子66名、女子42名に対し、志願者数は男子662名、女子566名の計1,228名に上っています。初等部の開校により、特色ある学校を多数擁する慶應義塾は、初等教育の段階からさらに教育の幅を広げることになりました。

初等部は幼稚園と並び、満6歳から大学・大学院までの慶應義塾の一貫教育の源流となる学校です。初等部の卒業生は、部長の推薦により湘南藤沢中・高等部に進学。湘南藤沢中・高等部の卒業生は推薦によりほぼ全員が慶應義塾大学の全学部に進学しています。

初等部と湘南藤沢中・高等部では、大学までを見据えた新たな小・中・高一貫教育の実現を目指して、基礎学力の重視、教育内容上の連続性に留意しながら、カリキュラムの充実に向けて協力しています。

また、個々の生徒については、発達段階に応じてきめ細やかに見守ることができる環境を大切にしています。両校の教員が互いに一部の授業を兼務で担当するなど、相互に交流を深めていきますので、生徒一人ひとりを、より長い時間軸の中で、より多面的・総合的に捉えるような姿勢が両校の学校全体に醸成されるに違いありません。

一貫教育校の最大の魅力である 「全員の内部進学」を実現

私立校の中でも「一貫教育校」を目指す者にとって、いちばんの魅力は上の学校にエスカレーター式に進学できることでしょう。

慶應義塾の一貫教育は小学校の慶應義塾幼稚園（恵比寿・共学）、または2013年開校した慶應義塾横浜初等部（横浜市・共学）に始まります。中学校には



慶應義塾普通部

普通部（日吉・男子）と中部部（三田・共学）のほか、湘南藤沢キャンパスに中高一貫の湘南藤沢中部部・高等部（共学）があり、幼稚舎の児童は3校（女子なら2校）ある中学校のどこに進学するかを自由に選択することができます（初等部の進路については前述の通り、湘南藤沢中・高等部に進学）。

高等学校としては慶應義塾高等学校（日吉・男子）、慶應義塾志木高等学校（志木・男子）、慶應義塾女子高等学校（三田・女子）に加え、米国ニューヨーク州に慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）（共学）が設置されています。中学校レベルでも、たとえば普通部や中部部の生徒は、日吉でも志木でも湘南藤沢でも、進学したい高校を自分で選び、その希望はほぼ100パーセント叶えられます。

それぞれの特色を持つこれらの学校から、最終的には高校卒業者のほとんどが、内部推薦で慶應義塾大学に進学します。大学の各学部で学ぶにふさわしいかどうかは大学が判断するのではなく、各高校がそれぞれ独自の選考に基づいて推薦を行っています。

首都圏の学校を見渡しても、希望者のほぼ全員が高等学校から大学に進めるのは、慶應義塾を除けば早稲田大学、日本女子大学くらいでしょう。さらに小・中からのスムーズな流れを考えると、慶應の“一貫体制”は、やはり際立ったものといえます。

しかし実際に慶應義塾大学に進む生徒は90パーセント程度です。これは進学できる人数の少ない医学部を希望する生徒が多いことなどが原因です。近年は法



慶應義塾志木高等学校



慶應義塾中部部

学部も医学部に次ぐ“難関”となっています。

そういった例外を除けば、必要な成績を収めることで慶應義塾大学への進学は約束されます。ただし、慶應義塾の関係者は「大学に進学できるから」ではなく、「慶應で学びたい」という生徒こそ歓迎したいと言います。中等教育に複数の学校が設置されているのも、こうした各学校の持ち味を活かして、多様な人材が育つことを期しているためです。

慶應義塾では、中学・高校は大学の予備校ではなく、10代の多感な時に能力を蓄えるための重要な場所として位置づけているのです。

校風やカリキュラムに根ざす「独立自尊」の理念

親が我が子を私立校に入学させたいと考える時、進学の問題と同様に重視するファクターのひとつに、躰や良識に関する教育体制があります。

慶應義塾では厳しい校則を設ける締めつけ型の躰は行わず、生徒一人ひとりの人格を尊重しています。慶應義塾の各校はそれぞれ独自の個性を打ち出していますが、基本的な理念は「自由な校風」で一致しています。

校則については、例えば湘南藤沢にはそもそも校則というものがなく「社会の良識が本校の校則」としています。他の中高も最小限のルールが存在するのみです。

服装に関してもかなりの自由が認められています。



慶應義塾湘南藤沢中部部・高等部



慶應義塾高等学校

志木高では「特別な式典などを除き制服着用義務はない」としていますし、中部部は「基準服」はあっても制服はなく、みな思い通りの格好で登校してきます。湘南藤沢も特別な機会を除けばスラックスとスカートのみの指定です。

関係者によれば「服装は自由ですが、学びの場にふさわしい服装を選べる感覚を身につけられるよう、指導はします」とのこと。ただし、華美に見えるファッションの生徒がいたとしても、頭ごなしに叱りつけるのではなく、「その格好はどうか？」と、自主的に考える機会を与える躰教育を行っています。

「独立自尊」という理念は校則や服装だけでなく、カリキュラムや授業の方法にも表れています。一貫校の生徒たちにとって、何よりの恩恵は受験勉強に忙殺される必要がないことです。「一貫教育」という大きな流れの中で個性を磨き、適性や能力を自ら発見し伸ばしていく。そのために授業にもさまざまな工夫がなされています。

1年次は1クラス24名という、贅沢な少人数制の普通部では、教学においてきめ細かな環境作りが期待できるでしょう。さまざまな動植物をスケッチする「フィールドノート」は3年間通して続けられ、観察眼や表現力を養うのに役立ちます。大学と同じキャンパスにある慶應義塾高では、高校生が大学の施設を使用したり、大学の講義を受講したりすることもできます（高大一貫講座）。志木高の語学課外講座では24言語が開講され、アジアやヨーロッパの主要言語をは



慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）



慶應義塾女子高等学校

じめ、アラビア語やスワヒリ語まで学べます。湘南藤沢中高では情報教育の充実と共に『ゆとりの時間』がユニークで、「基礎数学」や「ばんかい英語」といった苦手科目のフォローを目的としたものから、「百人一首をやろう」「生命科学実験講座」まで、多彩な講座が設けられています。こうしたカリキュラムの自由さも、詰め込み式受験勉強とは無縁の、一貫教育ならではのメリットといえるでしょう。

多様な人材、多彩な行事が「慶應カラー」を育む

外部の小・中学校から慶應に入った生徒の中には「内部生のなかにうまく溶けこめるだろうか？」と心配する人もいるようです。しかし、どの生徒も卒業する時には必ず「楽しかった」「素晴らしい友達ができた」と笑顔を見せます。そのような友人とは一生付き合うことも珍しくありません。

小学校で250人程度の児童は中学時点で約650人、高校時点では約1500人、大学では約7000人と、その数を次第に増やしていきます。「さまざまな経験を持つ多彩な人格が参画してくることで、お互いにより刺激になっています。このように育まれていく慶應独自の人のつながりが、『社中協力』といわれるもう一つの特徴です」と関係者は語ります。

慶應義塾各校にはいろいろな行事があり、文化祭や運動会、遠足、林間学校などを通じて、仲間との連帯を深めていきます。学校や世代を超え、他の一貫校の生徒や大学生と交流できるのも慶應義塾の魅力です。

とはいえ「いざよく学び、いざよく遊び」と普通部の校歌にあるように、当然ながら勉強は遊びより優先されています。レポート提出が多いことから分かるように、生徒たちは自ら考え、発展させていく主体的な学習を行っています。

一貫教育は「自動的に大学まで進学できる仕組み」と考えられがちですが、慶應義塾はこれを「より高い所を目指すために十分なエネルギーを蓄積する場」ととらえています。そのエネルギーとは知識や教養はもちろんのこと、「独立を考え、気品を持つ」という、揺るぎない福澤精神なのです。